

## テンドー・エマージェンス : 来るべき自己へ

著者名(日)	河本 英夫
雑誌名	「エコ・フィロソフィ」研究
号	5
ページ	117-127
発行年	2011-03
URL	<a href="http://doi.org/10.34428/00003430">http://doi.org/10.34428/00003430</a>



# テンダー・エマージェンス——来るべき自己へ

文学部 河本英夫

[音入れ]

アルピノーニのアダージョ

渦巻き(各種)、竜巻、入道雲、流氷、島宇宙図(各種)、落下する雪、カマクラ、球形のもの、雪だるま、そびえ立つ絶壁の連なり、植物のつる巻、桜の一拳の開花と落下、満天の星、一面のひまわり、霧、南極の氷の崩落、オーロラ、地下から地上に出てくる地下鉄電車、トンネルを抜ける汽車、一面の砂漠、  
いっさいの出現するもの、一切の視界の開けるもの  
人見さん画像(症例のかつての幼かった頃と現在、意識のなかった頃と現在の笑顔のように変化がはっきり分かるものの過去の側を載せる)エンディングで、現在を使う。  
荒川修作の映像各種

渦巻き、竜巻を映像の基調とする。

何かが突如出現する。

おそらくそれはつねに先送りされる予期のなかにあった。

だがそれはいつも予期を裏切るように不連続に出現する。

それは、満たされぬ思いを切断するように出現する。

開始の予感はあるが、この予感とは異なる位置から何かが出現する。

そして開始はいつも神秘に包まれている。

だが神秘だから開始があるのではない。

開始を語るには、人間の知識はなにもかも不足している。

開始は、一つの創発であり、自己組織化である。

そのためすべての条件を列挙しても、なお語りえないものが残る。

創発には入力も出力もない。

ただ現実の出現だけがある。

この分厚く不透明な不確定に挑戦し続けるのが、リハビリテーションである。

開始した変化を二つの時点で繋ぐもの、それが物語であり、物語は終わった後になって初めて紡がれる。

一切の現実到手遅れになって、はじめて物語は出現する。

失敗には十分な理由がある。

だが成功はいつも過度に整合化されている。

明確な理由と過度の整合化の隙間に、一切の絶望と希望は潜んでいる。

新たな私は、気がついた時には、つねにすでに私になっている。  
それは成ろうと意志した私でもなければ、成りたいと希望した私でもない。  
だが紛れもなく、私は Thisness(このこれ)である。

Thisness は、突如出現する。  
しかも私にとって出現する。  
世界のなかの Thisnessこそ、基体であり、  
一切の現実にもなっている。

人間の本質は、みずからを知ることでもなければ(ソクラテス)、世界を中庸の心で知ることでもない(アリストテレス)。懐疑の果てに、疑いようのないことを知ることでもない(デカルト)。ましてや世界を知るために運動することでもない。むしろ世界内の一つの基体に成りつづけることである。

## テンダー・エマージェンス

——来るべき自己へ

天命を反転するために

(追悼 荒川修作)

[音入れ]アマポーラ、小さな花、スプリーン

人見さん（緊張した身体、反り返った身体、重度の反り返り）  
宇宙の渦巻き図、大地  
球形の図形と面や立体や斜面を交互に  
シャボン玉・風船・滑り台、農地の面、街路の交叉面  
三鷹球形の部屋、養老の半球形(できるだけ球形の部分を強調して)  
球と面(立体)を対比的に画像に入れる

[映像は空間の内面を感じられるもの]

薄っすらと視界一面に広がった霧のなかから、一粒の雨滴が出現するように、そして光が宇宙の内側から宇宙へと広がるようにそれは空間の内側から空間へと向かって、身体の内側から身体へと向かって出現する。そう、空間と空間の内側を感じる感性がなければ、出現するものの兆しさえ感じ取れないままになる。身体の内面には、身体力感と身体強度が、まるで潜在性のよううごめいている。身体力感は、たとえ静止した身体であってもその内をうごめいている運動である。身体強度は、身体力感の媒体であり、緊張の度合いが指標となる。一切の接点を欠くものにも、それが生きている限り、身体強度の変動はある。この強度の変動に共振することはできる。だが強度の共振は、セラピストみずから病者へと成ることである。現れないうごめきを感じ取り、それに共振することは、リハビリの最後に残る課題である。

宇宙は二つに分かれる。創発(エマージェンス)という言葉に魅せられ、宇宙はみずから境界を引く。天空に一筋の光が入り、世界とその余白が形成される。子午線のもとに夜は明けてくる。そのとき、一切の現実が出現する。触覚の空間は球形である。視覚の空間は、立体であり、面である。球形の空間の輪郭は境界が決定し、面の空間の輪郭は位置が決定する。

出現は、球の内側から球へと出ていくことである。そのとき身体は、宿命のように過度の課題を背負っている。身体の形成と成長は、触覚の本性にしたがって、玉ねぎをむくように何度も球形に脱皮していくことである。だが身体の運動の空間は、面であり、面の交叉である。身体はみずから動くために、面を獲得しなければならない。一切の動物が、解決しなければならない最大の困難な課題は、球形の空間と面の空間を折り合わせることである。身体の内感形成と身体の運動は、どのようにしても整合化できない課題である。

ひとたび障害になれば、すべての身体はみずからの本性にしたがって球形へと回帰しようとする。

[映像] 握ったままの手、抱え込んだ腕、湾曲した脊柱、内回、丸まった猫、猫鍋、

みずから動くもの、みずから動こうとするものは、身体の空間を面へと移譲しなければならない。

身体は不可能な課題を抱えて生誕し、解決できない難題を抱えて生き抜いていかねばならない。

中枢性障害とは、この難題の変容した表現である。

身体が環境内の一つの疑問附であり続けるのはこのためである。

[映像]面を獲得する訓練場面、アスリートたち・ことにパラリンピック(陸上競技、球技)  
またパラリンピックから足や手のない人の泳ぎの映像

この移譲がうまく行かないとき、みずからでは解消できない過度の齟齬が出現する。

だがこの齟齬は運命のような自然性を帯びている。

それを医学は無造作に緊張と呼んでいる。

運動する身体は、みずからを面へと適応させる。

このとき身体は、雨戸を背中に背負って、この空間のなかを移動する。

球形の地形や球形の部屋は、由来の知れない懐かしさを含んでいる。

だがこの球の内面を動くものは、いったいどこに向かおうとしているのか。

[音入れ]

人見さん動画(できれば重度)

オフィリア各種、クレール各種、モネの睡蓮各種、京都寺院各種

雪解け、翌日まだらに解けていく雪面、雪を流す小川

私はいまだ生まれぬもの、生まれ続けるしかないもの、生まれ続けることしかできないものです。

私は虫や蝶を食べて生きているのかもしれない。

薄明の魂の色のなかで、造花の雪のように、

私の世界には、なにかが降りつづけています。

苔の生えた生きものたちの棲みかで、何気のない石ころが散らばっています。

それが私の姿かもしれない。

誰にも手を指しのべられることもなく、いっさいの環境からも支えられず、それでもなお私はなお私であろうとしているのです。

胎児の頃から、たぶん私はいつも世界内の一個の不連続点だったのです。

私の視界には、三つ編みのハトが飛び交い、解けていくウグイスが飛びあぐねています。目を患った霊媒のように、私には時間というものがありません。

ただなお、どこかに行こうとしているのです。

私にも、狂気をはるかに超え出た宇宙があります。

だが、この宇宙を掴むには、私には何もかも欠けているのです。

それでもなお、という姿勢が、それでなお、という言葉が、それでもなお、という天啓のような覚悟が、私の生きる姿なのです。

一切の絶望をはるかに通り越しても、それでもなお、私は一個の自己へと、それじたい差異である一個の自己へと向かっているのです。

あるいはそう願うことが、私と世界の最後の希望なのです。

[音入れ]ペイジョス

砂漠の風景、岩、巨大ビル、雑踏、満員電車、海岸、アラブの街々、地中海、船、バザール

出発は見合せだ。

最後の無邪気と最後の憶病。解っている。俺の嫌厭、反逆の数々を世に吹聴したところで始まらない。

さあ。前進、行李、砂漠、倦怠と憤怒と。

いったい俺が誰に自賛しようというのだ。どんな獣物を崇めなければならないのだ。どんな聖像に挑みかかろうというのか。どんな心臓を砕くのか。どんな嘘をついてはならないのか。

いっそ、正義にとりつかれまいと用心することだ。辛い命を、手もなく愚かに生きようか。萎びた拳を挙げ、棺の蓋を取り除き、腰を下ろして息絶えて。そして老いもなく、危なさもなく。恐怖は日本人には禁物だ。

ああ、何と寄る辺のない俺の身か。完成への燃え上がる想いの数々を、俺はもうどんな聖像に献けてもかまわない。

前世紀には俺は誰だったか。今ある俺が見えるだけだ。もはや放浪もなくなった。あてどない戦もなくなった。

そら科学だ。どいつもこいつもまた飛びついた。肉体のためにも魂のためにも——臨終の聖餐——医学もあれば哲学もある——たかが万病の妙薬と恰好を付けた俗謡さ。それに王子様らの慰みかそれともご法度の戯れか、やれ地理学、やれ天文学、機械学、化学・・・科学。新貴族。進歩。世界は進む。何故逆戻りはいけないのだろう。

ランボー『地獄の季節』(一部改変)

始まることのできないものがある。

始まることのできない時がある。

始めたはずなのに、何も始まっていないときがある。

始めたのに、翌日もとにもどってしまうことがある。

何度でも始めなければいけないことがある。

何もしないのに、始まってしまっていることがある。

500年に一人の詩人は、みずからの詩才を放棄することになった。

自分自身に区切りを入れることは、たとえそれが詩才を放棄することであっても、他に置き変えの効かないかけがえのないことである。

そして何度も再出発しなければならないことがある。

[音入れ]ポップス

各種・リハビリ室の風景・治療風景(岩崎さん、小寺さん、青木さん、大越さん、池田由美さんの教育風景、路上パフォーマンス)

混乱と苦痛をもたらすこの肉体という名の容器から、逃げ出したかったのです。この瞬間、わたしは、自分が生き延びたことに激しい失望を感じていたのです。

からだは寒く、重苦しい感じがして、苦痛に苛まされています。脳とからだのあいだの信号は途切れがちで、からだの感覚が掴めないほどでした。・・・わたしは廃物のかたまりで、抜け殻でしたが、まだ意識はありました。でもその意識は、以前とは異なるものです。というのも、これまでは左脳に、外部の世界を理解するための細かい情報が詰め込まれていたから。・・・意識は変わってしまいました。

わたしはまだここにいて、わたしはまだわたし。でも、これまでの人生で知っていた感情の豊かさや、認知面での結びつきが欠けているのです。

わたしは本当に、まだわたしの？

(ジル・ボルト・テイラー『奇跡の脳』)

もう体は回復しない。神経細胞は再生しないのだから、回復を期待するのは無意味だ。それだけは、この二年の間に思い知った。ダンテの地獄篇に「この門をくぐるものすべての希望を捨てよ」とあったが、この病気で同じである。

しかし私の中に、何か不思議な生き物が生まれつつあることに気づいたのは、いつごろからだろうか。初めのうちは異物のように蠢いているだけだったが、だんだんとそいつは姿を現した。

まず初めて自分の足で一步を踏み出したとき、まるで巨人のように不器用なそいつに気づいた。私の右足は麻痺して動かないから、私が歩いているわけではない。それでも毎日リハビリに励んでいるのは、彼のせいだと思う。・・・

私はこの新しく生まれたものに賭けることにした。自分の体は回復しないが、巨人はい

ま形のあるものになりつつある。彼の動きは鈍いし寡黙だ。それに時々裏切る。この間こけたときは、右腕に大きなあざを作った。そのたびに私は彼をなじる。

(多田富雄『寡黙なる巨人』)

ここには意識や意志の働きから切断されたまま、なおそれじたいで自己形成しようとする「自己」が取り出されている。しかも過度にくっきりと描かれている。

健常者とは、この巨人のおかげで支障なく日々の生活をおくることができる人のことである。

健康とは、この巨人の上に乗っていることを忘却できることである。

そして健常者とは、この忘却に気づかないまま日々を送るものである。

健康とは忘れることの別名であり、忘れることによってはじめて身に付くことがある。

この巨人は意識や意志や多くの高次認知機能とは異なる回路で形成され、しかも意識や意志が起動するさいには、健常であることの本性にしたがって、それじたい姿を現さず、潜在化し隠れてしまう。

無人称の巨人は呼吸する。

空気は、自己と空気との関係を形成して、この関係のなかではじめて呼吸ができるというようなものではない。呼吸することは生命機能の一つだが、外の空気との関係をつうじて呼吸を行っているのではない。

生命がそれとして誕生するさいにはすでに呼吸は行われ、呼吸するという働きをつうじてすでにかかわってしまっているような環境がある。

こうした事態を「浸透」という。

身体にとっての環境は、身体に浸透している。

レヴィナスはかつて、こうした空気を他者だと呼んだ。生きていくことに不可分な他者である。

無人称の巨人は、身体の重さを感じている。

重力も生命がみずから自己を形成するさいにつねに同時に不可分に関与している環境である。

しゃがむ動作にもつねにバランスを取るという調整能力が働いている。眼を閉じたまましゃがむことはできる。みずからのなかに浸透している重力に、どのように対応するのかは、身体とともに習得され体得されている。

重力がどこにかかっているかを、つねに感じ取ることができる。身体力感が形成されるためには、この重さの感じ取りを欠くことができない。

上半身を起こしたまま維持するためには、重力の感じ取りを欠くことができない。

それどころか重さを感じ取れなければ、首が座ることさえ困難となる。



眼を開けてしゃがみながら、横をすぎていく壁の推移速度や距離感が、しゃがむ動作のバランス調整に関与している部分がある。これはギブソンによってオプティカルフローと呼ばれた。だがそれは間接的な調整要因のごく一部である。知覚情報が直接身体動作の調整に関与する回路はない。それができるのは、すでに運動できるものだけである。

情報によって身体や運動が形成されることはない。

情報とは身体とともに選択する行為によって生じた事態の落差のことであり、エントロピーの落差に変換できる。

外界の情報が内界の情報に転化されるのであれば、内界はみずから同じものを作り出すことができる。

身体は情報の受容器表面だというのは、筋違いの比喻である。

[音入れ]作品のものをそのまま使う  
渦巻きを基調とする。

天児牛大の金柑少年  
直立少年——緊張歩行  
クジャクを抱える——特定の姿勢のまま静止(身体力感)  
ダンス——多動  
宙づり——寝たきり

画像を切り替えながら断片化する

[音入れ]ロック、ポップス

[治療風景・断片]

(岩崎さん治療風景・拉致監禁風景) カンディンスキーの図柄の解除を交互に織り交ぜる、カンディンスキーのデッサンの枠を解除したもの

認知は、つねに物事を細分特定化する。

特定化することによっては、認知はその場所でしか機能しない。

認知的治療介入は、必ず結果を出すことができる。

だが介入したことしか改善しない。

どのような認知的治療も、同じ壁に突き当たる。

それが認知の宿命である。

認知は細分化する。だが動作は細分化したのではもはや動作ではない。

動作にはおのずと起動する単位がある。

単位と単位との間に選択がある。

運動はこの単位の継起的作動である。

認知の細分化と動作はどのようにしても折れ合うことができない。

認知から行為能力を導くためには、認知を発達の再組織化の手掛かりとして活用することが必要である。

認知は、まさにみずからを限定することによって、物事を対象として知る。

みずからの身体さえ対象として知るのである。

だが対象として知られた身体は、もはや自然に動くことはできない。

運動は、認知が消える度合いに応じて自然性を獲得する。

認知の間接的活用は、固有の感性を必要とする。

認知によって運動が形成されるのではない。

認知の目標によって運動が誘導されるのでもない。

認知とともに、おのずと行為は形成され、行為の出現の後には認知は消えていく。

このとき認知は消えていくことによって、行為に内化される。

認知を行為の一部として活用すること、それはペルフェティの行った最大のメッセージである。

意識はつねにみずからをおのずと誤解する。

これが意識の自然性である。

足に意識を向ける。

足は動く。だが意識を向けたから足が動いたのではない。

そのとき意識は、意識を向けることで足は動いたと誤解する。

この誤解をまさに真に受けて誤用する治療がある。

しかも星のように夥しくある。

意識の機能は、選択の場所を開くための遅延機能であり、

さまざまな働きを折り合わせるための場所を開くことであり、

みずから自身を組織化することである。

意識を間接的に活用すること、  
デュアル・タスク(人見眞理)を学ぶこと  
意識の二重作動を活用すること

意識による認知という枠を解除すること、

それによって認知を行為に内化すること

どのような認知的治療にとっても、これが最後の課題である。

[音入れ]「見上げてごらん夜の星を」の英語版

人見さん、症例でかつての映像と現在の映像の対比がくっきりするもので、過去の映像と現在の映像とを対比的に活用する。

木本圭子さんの最新作・2本(キャプション・©Keiko Kimoto を付けてください。)

荒川修作映像各種

We are like stars in the sky  
Looking down at the earth  
We are lost but not alone  
And with love ... we can find rebirth  
And with love we will be alright  
Love is the light

We were lost alone in the dark  
Couldn't find where to go  
So alone and afraid  
But at last we're safe I know  
Because you love me we will be alright  
All love is the light

Look up in the sky feel with stars  
Every time light under the magic fire  
We are so far away  
But it seems to me that we could touch them all

(Love Is the Light song by The Platters)

躊躇と逡巡と絶望を先送りするだけの日々がある。  
終わることの約束ができない日々がある。  
始まっていると思っっているのに、何も始まっていない日々がある。  
何かが変わったのかもしれない日々があり、何も変わってはいないかもしれない日々がある。  
到来せぬ日々を先送りしながら、なお到来することを願う日々がある。  
到来せぬことを見込むのは、過酷さへの防御にすぎず、無力への居直りである。  
到来することを予告するのは、一足飛びに未来へと自分を確定することである。  
あらかじめ投げかけられた希望は、希望というより何かを確定したい脆弱さである。  
到来へと倦むことなく向かう態度は、立場や観点とは無縁である。

反復のなかに差異が生まれること、  
差異を含みながら、なお反復されること  
そしてその狭間にかすかな希望が出現する。  
かすかな希望を手にして、何度も再出発する。  
それによってなお天命は反転されうるのである。  
これが障害者と私たちの生きる姿であり、覚悟なのである。

[音入れ]カラオケ版・見上げてごらん夜の星を(稲垣君の歌)

出演 人見眞理 稲垣 諭 岩崎正子

制作 大崎晴地  
稲垣 諭 畑 一成 池田由美

映像提供 木本圭子 大越友博 青木直子 大西成明

照明 三田久載

演出 人見眞理

作・プロデュース 河本英夫